

現代語版『小説神髓』(一)

はじめに

『小説神髓』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強すべきだというのは、なるほど、そのとおりだとは思うけれども、実際に、『小説神髓』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでも少ないし、特に、この本を読んでほしいと思う大学二、三年生ではほとんど居ないといってもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髓』を現代語に訳することにした。訳にまちがいや不適切な表現があるかもしれない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遙集』(角川書店、昭和四九年十月)に中村完氏による詳細な注があるので、ここでは、最小限にとどめた。訳にあたっては明治十八年の松月堂版によった。

小説神髓

緒言

盛んなことだなあ、わが国に物語類が行なわれることは。遠くは、『源氏物語』、『狭衣物語』、『浜松中納言物語』、『住吉物語』があり、下つては、一條禪閣の戯作類を初めとして、小野の阿通の『浄瑠璃十二段』などがある。最近では、井原西鶴、八文字其笑³、風来山人⁴、山東京伝の仲間が前後して物語を書き著して、虚名を一世に得てから、小説はますます世に流行して、世の中の変わった才能のある文筆家連中は、みな争つて、小説を著し、あるいは、滑稽洒脱な式亭三馬、十返舎一九の類があれば、人情本に名を残した為永春水その人のようなものもある。柳亭種彦は、『偽紫田舎源氏』にその名をとどろかし、滝沢馬琴は、『南総里見八犬伝』に誉れをとどめた。ところが、明治維新の革新があたつて、戯作者たちは、しばらく跡を絶つて、

坪内逍遙 著
坂井健 訳

小説は、したがって衰えたが、今日この頃に至るにおよんで、またしても大いに復興して、物語が現れるべき時となったのであろうか、あちらこちらにさまざまな小説や物語を出版して、新奇を競うこととなったことであるよ。甚だしいのにはいたっては、新聞・雑誌の類にさえ、とても古めかしい小説を焼きなおして載せるものもある。勢いがこのよう(に盛ん)なので、現在、わが国で流行している小説や歴史小説は、その種類、その数、幾千万とも、数限りを知らない。牛が汗をかくほど重く、棟につかえるほど沢山だなどと言ったとしたら、かえって不十分なほどであろう。思うに、日本で、小説が(これほど)流行することは、この明治の聖代において古今未曾有といふべきである。徳川氏の末期にあたって、滝沢馬琴と、柳亭種彦などが現れて、しきりに物語を作ったので、小説がさかんに流行して、都会、田舎の老若男女を問わず、みんな争って、小説を読んでむやみと面白がって、もてはやしたけれども、やはり、現在と比べたなら、はるかに及ばないことだろう。その訳はそもそもどういふことかというところ、文化、文政の頃にあつては、読者もいくらか贅沢で、ただとても優れた著作だけを買ひ求めて読んだので、他の拙劣な小説や歴史物語は、自然に優れた作品に圧倒されて、世の中に流行することができず、むなしく原稿のままで終わり、もしくは、印刷されてからも、紙魚の餌食となるものも多くて、世に現れたものは稀なので、その種類や、その数は、現在に比べるといくらか少なかったのだろうよ。ところが、今日は当時とちがつて、小説といい、物語とさえいえば、どんなに下手な物語でも、どんなに田舎びた恋愛小説でも、焼き直しでも、翻訳でも、翻刻でも、

新著でも、玉石を問わず、優劣にかかわらず、みな同じようにはやされ、世の中で流行するというのは、おかしなことではないか。実に、小説全盛の未曾有の時代といふべきである。だから、戯作者といわれる連中もきわめて数が少ないわけではないけれども、(現在小説を書いているのは)だいたいは皆翻案家であつて、(ちゃんとした小説の)作者として認めることのできるものは、まだ一人もないのだ。だから、最近刊行した小説や物語は、あれもこれも、馬琴、種彦の二番煎じでなければ、一九、春水の贋物が多い。思うに、この頃の戯作者たちは、ひたすら李笠⁵の言葉を師として、着想を勧善懲悪に発することを、小説や物語の重要な要素であると考え、道徳という鑄型を作つて、努めて脚色をその中で工夫しようと望むので、しいて昔の人と同じような作品を作ろうとするわけではないだろうが、もともとその範囲が広くないので、知らないうちに同じような趣向の歴史小説を書いてしまうものなのだろう。これはまったく残念なことではないだろうか。とはいへ、このようになってしまったのも、その責任はすべて拙劣な作者の上にあるといえるだろうか。いやそうではない。優れた眼力のないあちこちの読者も関係し、影響しているのである。その訳はどういふことかというところ、もともと日本の国の習慣として、小説を教育の一つの手段のように思つて、しきりに善を勧め、悪を戒めることが、その大切なところであると唱えながら、やはり、実際の場合では、ひたすら殺伐残酷な、あるいは、非常に狼狽な物語ばかりを歓迎し、他の堅苦しい筋のようなものは、目を留めてさえ、見る人は稀である。そして、作者の、見識がないことは、総じて世論の奴隷であつ

て、流行の犬でないものはないので、競つて、時代の好みに媚びようとして、あの残忍な歴史小説を作り、あの猥雑な恋愛小説を書き、世の中の流行にしたがうものの、勸善懲惡という表向きの大義名分もさすがに投げ捨てにくいため、無理に勸善懲惡の趣旨を加えて、人情を曲げ、世態をねじ曲げて、無理な脚色をすることであることだ。こういう訳で、拙劣な趣向はますます拙くなつて、分別がある人や知識のある人の目からは、ほとんど読むに耐え難い。これはけれども、作者も読者もただ意味もなく小説をもてあそんで、本当の小説の大切な所を悟らず、あのまちがつた古い習慣をむなしく頑固に守っていることによるばかりである。どうして笑うべき極みではないことがあるか。いや、惜しむべき限りではないか。私は小さい時から小説を好んで、暇があるたびに小説を読んで、大切な時間を浪費すること、すでに十余年に及んでいるので、さすがに古今の小説について理解しえたことも少なくないし、かつまた、小説の本当の大切なところは果たしてどのあたりにあるかも、やや会得したと信じてるので、大変おこがましい行いだとは思ふけれども、あえて持論を世に示して、まず、読者の迷いを解き、かねては作家を啓蒙して、わが国の小説の改良進歩を今から次第に企てながら、最後には、西欧のノベル(小説)を凌駕し、絵画、音楽、詩歌とともに、芸術の各分野を抜いて、輝かしいわが国の物語を見たいと思う。願わくば、四方の学者や才人たちは、私が凡庸で至らないことをお咎めにならないで、私の熱心な真心と論旨を大切にして、熟読玩味なさりましたならば、これはどうして私の幸福ばかりであろうか、日本文壇の幸福であろう。恐れ入って申し上げます。

明治十八年という年の三月の初めの頃
春のやの南の窓に筆を走らせて

逍遙遊人しるす

〔注〕

- (1) 一條禪閣・一条兼良(一四〇二〜一四八一)のこと。関白太政大臣まで務め、学者としても高名であるが、『精進魚類物語』、『鴉鷲合戦物語』といった物語もこの人物の作とされる。
- (2) 小野の阿通・小野のお通(一五六八〜一六三二?)。小野正秀の娘。浄瑠璃『十二段草子』の作者といわれていた。
- (3) 八文字其笑・八文字其笑(?〜一七五〇) 八文字屋自笑の子。江戸中期の浮世草子作者。
- (4) 風来山人・平賀源内(一七二八〜一七七九)の戯作者としての雅号。
- (5) 李笠・李漁(一六一一〜一六八〇)。明末清初の戯曲家。李笠翁。読本に影響。
- (6) 春のや・坪内逍遙の別号は「春の屋おぼろ」。

小説神髓 上巻

小説総論

小説が芸術である理由を明らかにしようとするならば、まず、芸術が何であるかを知らなければならぬ。そうはいつても、芸術が何であるかを明らかにしようとするなら、世の中のまちがつた説を排斥して、芸術の本当の意味を定義するのが、まず、一番に必要なことである。芸術に関する議論のようなものは、古今にさまざまにあるけれども、だいたい、はつきりせず、完成しないで、これが本当の定義で

あると見るのできるものは稀である。最近、何某というアメリカの物知り^①が、日本の東京の府下で、しばしば、芸術の理論を講義して、世のまちがった説に反対されたので、今ここに事新しく、同じようなことを述べて、読者の手間を煩わせるのは、非常に心ない行いのようなので、ただ何某がおっしゃった芸術の本当の意味を抜き出して、それが正しいかどうかを論じて、自分の意見も述べたいと思っている。何某のおっしゃることには、「世界の開化は人間の力の功績に他ならない。しかも、人間の力の功績には二種類ある。一つは、生活の必需品であり、もう一つは、装飾である。生活の必需品は、ひたすら人間生活の必需の働きを提供するのを目的とし、装飾は、人間の心を樂しませ、品格を高尚にすることを目的とする。この装飾を名づけて、芸術という。だから、芸術は、もっぱら装飾することを主な要素とするので、生活の必需品ではないと考えるはいけない。人間の目や心を樂しませ、品格を高尚にすることは、どうして人間社会の一つの緊急で大切なことでないことがあるか。このことをまとめてみると、両者は、ともに社会のために欠くことができないものだ。そして、そのちがつているところを見ると、生活の必需品は、本当に、実用に適しているからこそ、善美となり、芸術は、善美であるがために、実用に適するようになるというちがいがあつた。たとえば、この小刀は、非常に善美である。というのは、生活に必要であるからこそ、善美なのだ。あの絵画は必要である。つまり、善美であつて、人間の品格を高尚にするがゆえに必要なのだ。このように見えてくると、芸術において善美とするものは、それが芸術である理由の本当の中心点であることは明

らかである。云々」とおっしゃつた。また、何某さん^②が言うことには、「芸術とは、人文教育の発達のためのすぐれた機会、すぐれた効用、これをいうのだ。なぜこのようなことを言うのか。芸術は、人間の心と目を樂しませ、品格を高尚にすることを目的とするからである。心と目を樂しませるからこそ、友愛温厚の気持を起し、品格が高尚であるので、貪欲で刻薄な気持を押さえる。それが造形芸術に現れるときは、絵画、彫刻、陶芸、漆器などの何ともいえない美しい味わいになり、それが音曲や人間の姿に現れるときは、詩歌、音楽、舞踏などの何ともいえない美しい境地となる。そもそも、人間が、美しい何ともいえないすばらしい世界に出会つて、神韻や雅な極地向きあつたなら、ゆったりとして、何よりも清らかで気高い、不思議な気持を感じないものはない。これをこそ芸術の不思議な働き、役割というのである。国々の文明も、やはり、実に、この働きと役割に原因しているというべきである。芸術が、重大な事であることは、どうして、社会の一つの大きな差し迫つた重要な事でないことがあるか。云々」とおっしゃつた。思うに、後の何某は、先の何某の説を受けて、これを詳しく述べたものというべきだ。

本当に、二人の何某の言うように、芸術に人文教育の働きがあることは、決して疑うには及ばないけれども、また、退いて考えると、どうかすると、芸術の本当の意味について、論理のまちがいが無い、とは言えない。そこで、もう一通り、その論理を論じて、私の疑問を示そうと思う。そもそも、芸術というものは、もとより実用の仕事ではないので、ただひたすら人の心と目を樂しませて、その表現を完璧に

することを、その「目的」とするべきはずである。その表現が完璧になつた時には、見るものは自然と感動して、あの貪欲な欲望を忘れ、あの刻薄な感情を脱して、他の高尚な美妙な詩想を楽しむようにもなつてゆくだろうが、これは自然の影響であつて、芸術の「目的」ということはできない。いわゆる偶然の結果であつて、本来の目的とは言うことは難しい。もし、この説をまちがっているとすれば、世の中の芸術家といわれる連中は、彫刻師であれ、絵描きであれ、まずその制作をなすにあつて、「人文教育」という鑄型をつくつて、その範圍に創意工夫をかぎつて、そして制作をしなければならぬ。これは甚だしくまちがつたことではないか。あの実用技術家が小刀を作るのを見ると、ひたすら実用に適するようにということを目的とするからこそ、「よく切れる」ということを基準としてその小刀を作ることである。芸術家も、また、これと同じく、もしその目的とするところが、人文教育ということであつたならば、鳥や獣の像を彫刻するにも、山水草木を描くときにも、常に人文教育をその基準としないわけにいかない。これはどうして至難の業でないことがあろうか。ひたすら、表現を完璧にしようとして、工夫を尽くして写してさえ、名画を描くことは非常に難しいというのに、その他に、このような首かせができて、その創意工夫を束縛したならば、精妙さを完備した絵画を描くことは、ますます困難で、いよいよ難しい。だから、芸術というものは、他の実用の技術とはその性質が異なつていて、初めから規則をもうけて、これを作ることはできないのだ。その表現がほんとうに完璧になつて、鑑賞する人に、しらすしらすのうちに、魂が浮き出し、心が揺

れ動くような、いいようのない美しい境地を感じさせることこそが、これが本来の目的であつて、芸術が芸術である所以なのだが、芸術が品格を高尚にし、その美妙な思想をこれ以上ないほどに清らかにして、それによつて人間の性質を高尚にするのは、これは偶然の作用であつて、芸術の目的ということはできない。したがつて、芸術の本当の意味のようなものも、目的という二字を除いて、芸術は、人間の心と目を楽しませ、かつ、人間の品格を高尚にするものであるといつたならば、その場合は、正しいが、もしそうでないならば、その場合はまちがっている。これは些細な論のようだけれども、いくらか疑問な点を述べて、世の有識者に質すのだ。

世の中で芸術と称するものは一つではない。かりに類別して二種類としよう。いわく、形のある芸術、いわく、形のない芸術、この二つである。いわゆる形のある芸術とは、絵画、彫刻、寄木細工、織物、銅器、建築、造園などをいい、いわゆる形のない芸術とは、音楽、詩歌、戯曲の類をいう。そして、舞踏、演劇の類は、この二種類の性質を合せて、それで心と目を楽しませる。思うに、演劇、舞踏の類は、詩歌、戯曲を実際の動きとして表現し、かつ、音楽を活用して、その素晴らしい演奏さえも奏でるからだ。今も昔も、あらゆる国ですべて、ことごとく演劇を愛好し、よろこび、舞踏を愛でるのも、当然のことではないか。芸術の種類がさまざまであるのは、だいたいこのようであるが、その主要な点は何かというところ、すべてこれは眼を楽しませ、心を悦ばせることに他ならないのだ。ただし、その芸術の性質によつては、もつぱら、心に訴えるものもあるし、もつぱら目に訴えるもの

もあるし、もつばら、耳に訴えるものもある。たとえば、形のある芸術のようなものは、みなもつばら形を主に人の目に訴えるが、音楽、唱歌は、耳に訴え、詩歌・小説の類は、もつばら心に訴えるのをその本分とするようなものだ。だから、形のある芸術は、もつばら色彩と形容を主眼として、その工夫をも練ることだけれど、音楽、唱歌はこれに反して、まず、もつばらに声調を主として、その創意工夫も凝らすのであることだ。詩歌・戯曲は、これともちがついて、主として心に訴えるので、その主要なところも、色彩ではなく、音響ではなく、別の、形がなく、音もない、人間の感情がすなわちこれなのだ。昔の人も、詩を論じて、声を発する絵画と言ったではないか。(これは)結局、詩歌が、描くこともできず、見ることもできない心のありさまをも、実に細やかに写し出して、人に見えるようにさせるのを称賛したのでだろう。さて、何物がこの世の中で最も描きにくいものかと問うならば、あの人間の情欲ほど描きたいものはないだろう。喜び、怒り、愛、憎しみ、悲しみ、恐れ、欲の七つの感情もその表面だけを表現しようとするのは、それほど難しいことではないが、その真相を表現しようとするならば、絵描きの力をもっては及ぶはずもない。いや、俳優の手を借りても、なお写すことができないことが多い。我が国では、演劇にも別に(義太夫の)チョボといった曲を作つて、身振りでは演じられず、台詞でも表現できない、人情の微妙ところを演ずるではないか。これだけでも戯曲の長所は、まず一通り分かるであろう。我が国の短歌、長歌のたぐいは、いわゆるポエトリー(西欧の詩)と比べるときは極めて単純なものであるから、わずかに一時の感

情を言い述べたものにとどまるものであつて、あの述懐の歌(エモーショナルポエトリー)、哀悼の歌(エレジックポエトリー)に似ている。中国の詩もこれと同じく、おおむね簡単なものが多い。「長恨歌」、「琵琶行」のようなものは、ややポエトリーに似ているものの、その脚色も淡白で、西欧の詩とは性質がちがつている。だから、西欧のポエトリーは、そもそもどのようなものかというところ、その種類はもとより一つでは足りない。歴史詩(エピックポエトリー)と称するものがあり、物語詩(ナレーシブドエトリー)と称するものがあり、あるいは教訓を主とする詩があり(デイダクティック)、あるいは諷刺諧謔を目的とする詩があり(サティリカル)、音楽とともに歌われるべきものをリリック(歌詞)といい、劇場で演じられるべきものを伝奇という(ドラマ)。⁽⁸⁾なお、この他にも細かく分ければ、その種類はかすかすあるだろうが、今は煩雑になるのを嫌つて省いた。要するに、ポエトリーは、わが国の詩歌に似ているよりも、むしろ小説に似ているもので、もつばら人の世の心のありさまを写し出すことを主とするものである。我が国の短歌、長歌のたぐいは、いわゆる未開の世の中の詩歌というべきで、決して文化が発達した現在の詩歌とはいふことができない。このように言つたからといって、皇国の歌をとて未熟だといって批判するわけではないが、総じて文化が発達して、人知の段階がいくつかわ進むに至ると、人間の感情もまた変遷して、いくらか複雑とならないわけにはいかない。昔の人は素朴で、その感情も単純なので、わずかに三十一文字でその心の思いを述べたけれども、今日この頃の人間の感情をわずかに数十の言葉でもって述べ尽くすことが

できるはずもないのだ。かりに感情については数十字でもつて言い尽くすことができたとしても、他の心のありさまを写すことができないれば、いわゆる完全の詩歌ではないので、あの西欧の詩歌とともに（同じ）芸術の壇上に立つことはできないだろう。これはどうして残念なことでないことがあるか。だからこそ、外山、矢田部、井上、の先生たちが、ここに遺憾を抱かれて、『新体詩抄』一冊を現わし、世に公にされたのだ。読者は、もしポエトリーの内容を知りたいと思うならば、『新体詩抄』をはじめとして、『東洋学芸雑誌』に掲載した新体詩および井上巽軒先生の作られた長編の詩（注「孝女白菊」）を合わせてみたならば、その一部の内容を、ともすれば窺うことができるかもしれない。そもそも小説は韻のない詩ともいべきで、字数に制限のない歌ともいべきである。世の浅学な連中にあつては、詩が主眼とするのは、ひたすら韻を踏んだ語句にあると思うけれども、これははなはだしいまちがいである。詩の重要なところは、すぐれた趣である。微妙な趣、素晴らしい境地を写しだすことができたなら、詩の本分は、その時、十分果たしている。どうしてつまらない韻を踏んだ語句などをむりに用いる必要があるか。イギリスのすぐれた詩人ミルトン翁は、早くからこのことを頻りに論じて、韻を踏んだ詩を排斥し、無韻の長詩（プランクバース）を工夫しはじめた。思うに、韻を踏んだ語句を使うことも、詩を吟唱していた時代にあつては、とても大切なことであつただろうが、現在のように黙読して、ただ全体の素晴らしい趣を愛で、喜んでいる世となつては、それほどまでに大切なものとも思われない。物にたとえて言うならば、画家が使う絵の具と

同じように、なくても事が足りるだろうものなのだ。だから、小説・歴史小説であつて、もしすぐれた趣に富むことができたならば、これを詩といい、歌と呼んで、芸術の壇上に立たせても決して不都合がないだけでなく、まことに当然といふべきである。結局のところ、小説の中心とする所は、もっぱら人情と世態にある。すぐれた着想で筋を作りだし、巧みに人間の感情を織りなし、かぎりなく、きわまりない不可思議な原因から、また、さらにかぎりない種々さまざまな結果さえをも、とても美しく写し出しながら、この人間世界の原因と結果の関係の秘密を見るように描き出し、見えにくいものを見えさせるのを、その本分とするものなのだ。だから、小説の完全無欠のものにおいては、絵画に描けないものをも描写し、詩に十分描けないものをも表現し、かつ、演劇で演じることのできない、微妙な心理をも写すことができる。思うに、小説には、詩歌のように字数に制限がないばかりか、韻を踏んだ語句などという束縛もなく、なおまた、演劇・絵画とはちがつて、ただちに心に訴えるのをその性質とするものであるから、作者が創意工夫を凝らすことのできる範囲は非常に広いといえる。これこそが小説が芸術の中に（重要な）位置を占める理由であつて、ついに伝奇や戯曲をしのいで、言語芸術の上の最大の芸術の最高のものといわれる原因であるかもしれないであろう。

ちなみに言う。菊池大麓先生が訳された『修辭及華文』と題した小冊子がある。詩文に関する議論のようなものは、特にもつとも詳しく行き届いていると思われるので、左に抜き出して、本文の不足を補う。

「詩の領域に属する文章は、その種類が非常に多い。そして、その共通した性格を一つに定めるのが難しいことは、これまで何度も経験してきたことだ。そして、詩句にリズムがあるものだけがもっぱら詩であると限定できないことは、散文でも常に高尚な詩想を持つものが多いことによつて、これを明瞭にすることができなのだ。まして、詩句にリズムを持つものでかえつて詩の中に席を占めさせることができないものが多いのではなおさらだ。(中略)

思うに、詩の題材に適する最も正しい現象はここに一つあると考える。そして、その一種は、古今の文学の上に次々と現われ、これまで一度も廃れたことのないものである。つまり、外界の現象、人間世界の栄枯盛衰などであつて、不思議に心を揺り動かす物がこれである。詳しく言つと、外界に現われたさまざまな物品、および、自然の予測することのできない力と、ほとんどその勢いが同じようにさかんな人間の本当の姿、人生で忍ぶことのできない悲しみ、勝利、愛情、卓絶、高尚、不朽の事業の完成を目指すこの上ない志、自然と人生とのすばらしさ、変化の多様性と複雑ならびに神秘、理性を超えた範囲にあつて、宇宙を支配すると考えられる神々、果てもなく広がる天空の形容、地上の事物の奥深い有様、年月と季節がめぐり行くさま、人間社会、人間社会の君将、英雄の有様、事業、変転、国運の省長を決する戦鬪のありさま、人間の開明進歩を任務とする知力のすぐれた人の努力、人間の行いで、自然に打ち勝とうとする現実などがこれに属する。さらにこれをまとめて言つと、およそ人間の感覚も、徹底して、ゆ

つたりとし、勢いが盛んで、崇高で、馴れていて誠実で、あでやかで、悲しく、快活、あるものはそこから消え、あるものはそこに留まる、というあらゆる現象を、皆包まないものはないのだ。さて、世間一般の大切な事柄は、人が生活していくために欠かすことができないので、人々はこれに意を注ぐのが常だけれども、それが人の心を感動させ、捉えらるゝということは、外界に属す現象のようには、できないので、自然と詩の中心に列することができないのだ。かつ、学問上の深い知識、学問を講ずることに属する事柄、対数、比例の表、収支の計算、分子の分量などは、世界で最も大切な事実であるが、また、詩の題材に加えることはできないのだ。

(また略) リズムのある言語が高尚な題材に適するものだと考へることは、世間で常に言うことだが、思うに、散文体の言語は、これを人の世でたとえると、ちょうどふだんの生活の日課をしている時のようであつて、人の心がゆつたりとして落ち着いている様を現わすのに適するものだと見える。そして、詩が散文に對する働きは、ちょうど、舞踏がふだんの歩行に對するもののである。けれども、散文が初めて文章を表現する一つの(大きな)方法となつて、これを巧みに使うようになってから、無数の著作が世の中に広まり、そして、その題材が大いに詩に適し、その扱いや修飾の妙がほとんど最も優れた韻文に等しいものが現れるようになった。(また略) ただし、現代の散文の著書であっても、その実体は最も高尚な詩想にその源を求めることができる

のであって、ただそれが詩とちがうところは、厳密なりズムを捨てて、調和した言語にすべてを委ね、それによって自由に流露変化させるものをいうだけなのだ。云々。」

また叙事詩（エピックポエム）を論じたところにいう。

「時代の古い新しいを問わず、洋の東西を問わず、およそ、記事の面白さは、その叙事詩の最も重要な点である。すなわち、志を鼓舞激励する事業の説話、あるいは、危ないところで虎口を逃れ、水火の災難に遭遇し、注目して手に汗を握るような状態、あるいは、読者に悲しみのあまり断腸の思いをさせる心境、あるいは、初めに艱難辛苦をなめて、最後に幸せをつかむ男女離合の恋愛小説などは、人の心を奪い、人に現実から脱して夢の世界に入るようにする詩想を与える。実にこの技術は、さまざまな想像が次々と現れる不思議な世界に人を入らせるすぐれた道具というべきである。そして、この種に属する文学のそれぞれのありさま、ならびに、ホメロスからバージルに至る間に現れた文体の沿革、および、中世のロマンスから現代の小説（ノベル）に至った実際などは、皆精密に詳しく解説する必要があるのであるが、これらは別に文学史で論究すべき大業であって、ここに詳説する余裕はない。そして、この種の著書が最近の現代的表現として尊ぶ書物は、もっぱらその本領と人物における活発なありさまを、ますます人生の実際に近づけさせ、それによって世の中の中すべての物事の消長、並びに人間の日常の真の趣を読者の胸の中にはつきりと現わし、また、事実と違うところがあると思わせないのである。だから

ら、これらの著書に現わした男女の行為や仕事は、ほんとうにその様子を写し出すので、読者に直接人間世界のありさまに接する感じを起させることができるのだ。そして、もしこの様子を読者がかつて経験した同じ事実とお互いに符合させる時は、読者はそのために驚くほどの喜びを感じて、自然と己を戒める心を起すだろうし、また、人間にとってこの上もなく楽しいことで、しかも真理とちがわれないものにしたならば、何の種類の手物であるかを問わず、常に無上で完全な地位を占めるべきである。デフォーさんは、世界の実際のありさまを表現するのに、上手く記録体の文章を使った人で、スコット、ブルーワー（リットンのことをいう）などの諸氏もまた歴史の教授をするのにこの文体を使った。そして、小説家が（民衆を）教え導く目的とするものは、通常は勧善懲悪を趣旨とするものであるが、ほんとうにこの目的ならばにその他の主旨も、またこの技術の進歩によって、いよいよすぐれたものになることができるのだ。けれども、この種の書物は、人間の果てのない嗜好に供するものなので、そのことが理屈にあるか合わないかを問わず、もっぱら時流の移り変わりにしたがって、これといっしょに変化すべきばかりである。」

〔注〕

〔1〕何某というアメリカの物知り・フェノロサ（一八五三―一九〇八）のこと。東京大学で政治学・経済学・哲学・論理学を講義、逍遙も聴講した。以下の引用は、フェノロサの講義を筆記翻訳した『美術真説』の序論にあたる部分。

(2) 他の何某さん・大内青巒(一八四五〜一九一八)。仏教学者、思想家。

以下の引用は「大日本新美術新報 緒言」(『大日本美術新報』一号、一八七三、一一)から。

(3) 述懐の歌。emotional poetry。感情的な詩。

(4) 哀悼の歌。elegiac poetry。挽歌。

(5) 歴史詩・epic poetry。叙事詩。

(6) 物語詩・narrative poetry。物語詩。

(7) 歌詞・Lyric。抒情詩の意味もあるが、音楽とともに歌われることから、歌詞の意味にとった。

(8) ドラマ・drama。戯曲。

(9) 外山、矢田部、井上の先生たち・外山正一(一八四八〜一九〇〇)、矢田部良吉(一八五一〜一八九九)、井上哲次郎(一八五五〜一九四四)を指す。『新体詩抄』(一八八二)を共著。井上哲次郎の号は「巽軒」

(10) 『東洋学芸雑誌』・一八八二年創刊。外山正一、井上哲次郎らが寄稿。
(11) 『孝女白菊』・『巽軒詩鈔』下巻(二八八五)掲載の漢詩。のち、落合直文によって新体詩に翻案され、愛唱された。

(12) 菊池大麓・数学者(一八五五〜一九一七)。『修辞及華文』翻訳当時は東京大学教授。

(13) 文学・『修辞及華文』の原文は、「詩文」。『修辞及華文』原典の Robert Chambers “Information for the people” “Rethoric and belles-Letters” の該当語句は「literature」。なお、原典は、菅谷広美『『修辞及華文』の研究』(教育出版センター、昭和五年八月)収録の一八六七年版による。

(14) 記事の面白さ・原文「記事の本色」。原文『修辞及華文』の原典の該当部分の原語は「Plot-interest」。

(15) 記録体の文章・『ロヒンソン・クルソー』が旅行者の視点を採用して、体験記の体裁を取っていることを念頭に置いている。